





ファーストフード店の店員のおねえちゃんは今日も元気だ。ここにはいろんな人がいる。ガラスのドアを開け、施設の中に入る。店員のおねえちゃんはミュに親切だ。仕事の邪魔しないように、言ってきかせている。ミュは肌が荒れている。本人曰く、お風の仕事をしているからだという。ミュはバカだから、タトゥーだらけだ。南国のヤシの木のタトゥーなんかしているのはミュくらいなものだろう。ミュはここでは体の自由がきかない。ピル太りしているのか、すごく長く太った胴をしていて、いつも這うようにしているのだ。まるでアザラシだ。親切なおっちゃんとか、店員のおねえちゃんとか、ミュとかいて、僕はここで幸せな日々を送っていた。でも、ある日黒い服を着たやつらが、施設のガラスのドアの鍵を破って進入してきた。奴らは武器を持っている。奴らは僕を、捕らえ、捕虜とした。店員のおねえちゃんが逃げろと言ったけど間に合わなかった。ミュはどうなったのだろうか？悲鳴は聞こえなかっただろうか。捕まえられ、監視におかれた。他の人たちがどうなったかはわからない。ただ、僕が生かされているのは、いや、僕自身は消えるかもしれないが、奴らの言うところによれば、人格は残るという。そこまで、して僕の人格を生かすのはなんでだ、と考えたとき、僕はわかった。奴らは僕を量産型にするのだ。まだ十代だった店員のおねえちゃんが、30代になって僕の隣にいる。この薬を飲めという。白いカプセルだ。飲みたくない、飲んだら量産される、飲みたくない。でも、飲まなきゃいけない……。

名前を呼ばれないモノ



僕はいつも、名前を呼ばれない。いつもサニーとかイカーとかが代わりに名前呼ばれている。僕はいつも、名前を呼ばれない。緑色のコウモリ翼の悪魔が出てきて、ビリヤードをする。奴のテーマは何だったっけな、そうだ、ビリヤードのようにして人は殺せるか、だった。本人曰く、複雑系の殺人、らしい。ぜんぜん違う人に嘯いて、その知り合いの知り合いを殺せるか、って話だった。あいつには魂がない、ひとめ見てわかった。あいつと似たやつがいる、お墓で木に吊された女の子だ。彼女は、ジャニーズ事務所に殺されたって言ってた。足のほうを結ばれて逆さ吊り、足のほうを結ばれて逆さ吊り、足のほうを結ばれて逆さ吊り。緑の悪魔と、逆さ吊りのおねえちゃんと、僕の共通点は、自分の名前を呼ばれないことだ。あまりにも狂った魂は世界から締め出される、代わりに他のやつ、サニーとかイカーとかが僕の代わりにやる。そんなわけで、僕はいつもサニーにむかっている。僕の代わりに動くんじゃない、僕の代わりに仕事するんじゃない、僕の代わりに恋愛するんじゃない……。サニーがアングロサクソンの太陽になったので、僕は奴の顔を殴ろうとした。でも、その動きはサニーが狐先輩の顔を殴ることに変化した。世界のフィルターを通過させてもらえない。世界のフィルターを通れない。僕は世界に入れない。サニーが狐先輩の顔を殴ろうとしたのを見て、緑の悪魔はこう言った。これは、興味深い。狂った調子で喋った。いいかね、君が奴を殴ろうとした動きが、そのまま世界に、フィルターを通過して反映されている、我々として、まんざら世界と関わるできないわけではないということだよ。これが、ビリヤードだ。つまり、君がサニーの顔をほんとうに殴りたいのなら、自分の顔をおもいきりひっぱたけばいい、これで奴はダウンするはずだ。もちろん、君もダウンするが……。僕は、殴るよりひどいことをしてやろうと思った。僕は自分の首をしめた、僕は自分の首をしめた、自分の首をしめたらサニーが苦しそうな顔をした。でも、狐先輩もなんだか苦しそうな顔をしている。それを見て、緑の悪魔がまた、うれしそうな顔をした。そうか、わかった、これは全体にかかるのだな……。自分の首をしめてもなかなか死ねない。翌朝起きて鏡を見たら目から血が出て赤くなっていた。



「新タワー」が建ってしまった。「登録」してない僕は、アパートを追われた。僕の「受信機」は故障してザーっという砂嵐しか写らない。というわけで、僕は夜、地ベタに寝て、昼はコンビニのゴミ箱を漁った。同じような人たちもけっこういて、「登録」された家族を頼るか、路上でひからびて死んでいくかどっちかだった。

「登録」しようと思った僕は区役所に行って、「登録」してきた。そのとき、片腕しかない職員が出てきて、僕を対応した。「登録」と共に、駐車場整理の役目を仰せつかった僕は、歩行者に気がついた。「受信機」は仕事用の無線も使える優れモノで、僕の脳の映像も、はっきりと写るようになってきた。車が入ってくるときには歩行者を止め、歩行者が通るときには車をライトセーバーで止める。簡単な仕事だ。一週間くらいして、すごくきれいな女の人が歩いていたので、見とれていたのだけれども、その女の人片腕がなかった。最初は後ろに腕を隠していたのかと思ったのだが、通り過ぎたときにまじまじと見つめたら、やはり片腕がなかった。ふと、「受信機」の映像が乱れ、僕は熊になっていた。目の前には白装束のお坊さんがいて、日本刀を構えていた。そのお坊さんは、気合いをこめて僕のいっぽうの腕を叩き斬った。気づいたら、その女の人はいなくなっていたけれども、腕はなんともなかった。けど、それ以来、「受信機」は不調で、とくに音が聞こえなくなった。耳の片っぽだけだけれども。「修理屋」に行ったところ、「青い歯車」を渡されて、これを埋め込めば直るはずだ、と言われた。国民受給ポイント額がべらぼうにかさんで驚いた。一気に減った。これじゃあ、マッシュ・ダイナミック社製の、「受信機」が買えないじゃないか。脳の映像がやけにクリアになるヤツ。そういえば、僕の職場にはやけに手足のどっちかがないヤツが増えてきた。B1の食堂にコックがいて、一人は片っぽの足がなくて、もう一人は目が片っぽ「マッシュ・ダイナミック」社製のヤツになっていた。目に「受信機」を埋め込むと脳の神経と直結するので、記憶画像を取り出すのに便利なのでうらやましい。アレを埋め込むために、わざわざ目を抉り出すヤツまでいる。体の一部が欠損するのは、今の時代ではトレンドになっている。誰も彼もが「マッシュ・ダイナミック」社製の「受信機」を埋め込みたがっているからだ。

でも、老人たちは古い「受信機」にこだわっている。「旧タワー」からの受信しか受け付けない

けど、彼らはそのまま死にたいそうだ。そういう老人たちは「登録」の更新をしないで、五体満足のまま死んでいく。



「きゃーっ」悲鳴があがって、何かのぐしゃってつぶれる音。空から大きな石がふってくる。新宿東口、丸井前にいた僕はわけもわからず逃げまどった。みんな逃げまどっている。新宿のビルすべてが巨大な地震のため、崩れかかっていた。僕は、丸井に逃げようとしたのだけれども、シャッターがしまっている。壁を見ると小さなドアがついていたのでそこから体を屈めて入った。それは地下鉄通路に続いていた。どこもかしこも、何かの衝撃で崩れかかっている。やっと駅ホームにたどり着いたら、巨大な女神像が崩れて、バラバラの石になったものが、彼女の大きな頭とともに宙に浮いて電車の代わりに流れていた。あの女神像はどこかで見たことがある。

数日後、新宿のビル群は元通りになっていた。また丸井の前を通りがかったところ、小さなドアがまだあったので、覗いてみたら青い歯車たちが大小、緻密な形で組合わさって回っていた。

◆ ◆

M子はある宗教を信じていた。古代バビロニアを起源とするその女神は、七枚にヴェールを一枚、一枚脱いでいくというセクシな踊りで有名だった。その踊りを瞑想の中で視覚化しているうちに、彼女はいつも女神と合一し、奇妙な陶酔を味わうのだった。信じていたのに、信じていたのに……。彼女は、風俗の仕事をしていた。あんまりに、きつい仕事だった。むせかえるイソジンの匂いと、汚い男たちの唾液を飲むことを強要させられ、汚いちんこをしゃぶらなくてはいけない。自律神経失調症を煩った。自殺サークルで練炭自殺しようとしたが、一緒に自殺しようとした男と恋に落ちた。暗い影のある男だったが、横顔がかっこよかった。いっしょに生きていこうとしたが、一ヶ月後、消えた。お風の仕事帰り、新宿駅の地下鉄のプラットフォームで、ふとまた、耐えがたい悲しみがおそってきた。彼女は電車が来た瞬間、飛び込んだ。「ぐしゃっ」という音が聞こえ、ホームにいた人たちの「きゃーっ」という悲鳴が続いた。私がバラバラになっていく、女神がバラバラになっていく、頭が半分飛んで、他の体のパーツもバラバラになっていった。女神の石像がバラバラの石の破片になっていくのが見えた。巨大な石像の破片が、暗い地下鉄線路を流れていく……。

バラバラになった女の肉片を拾い集めていた職員は、駅の下の暗部になっている処に頭の破片があるのを確認し、拾うために腕を突っ込んだ。破片は、血液によってコンクリートにこびりつき

、なかなかとれなかった。体の大部分は拾い集めた、この破片を拾ったら回収は終わりにしよう。

あんな仕事たいへんだなあ、と遠目にその作業を見ていたが、職員が、奇妙な服を着た女性に変わるのを見た。ヴェールのようなものを何重かに羽織ったその女性は、中東系の顔立ちをしていた。が、その女性と目があつた瞬間、この駅ホームには自殺防止用のホームドアがついていることに気づいた。そもそも、飛び込めるわけがないのだ。そう、気づいた瞬間、電車は何事もなかったかのように自分の目の前を通過し、いつものようにプシュ〜という情けない音とともに家路へのドアを開けた。



あるところに、命令することから離れられないおばさんがいた。おばさんは、いつも言う。何々しろ、といつも言う。おばさんは、そのころ、金も地位もあったので、権力が集中した。命令することは、とても気持ちがいい、何々しろ、と言うのは正しいことのように思えたし、実際それでうまくいっていた。だが時はたち、おばさんの元から人は離れはじめ、その権力も力を失ったが、おばさんは命令することから離れることができなくなっていた。何々しろ！誰もいない部屋で、おばさんは命令し続けた。そして、誰も従わないのを不思議に思い、従わないものたちにどんな残酷な制裁をふるおうか、日々、妄想し続けた。妄想が彼女の精神を悪化させたが、おばさんの精神は硬直化し、変えようがなかった。おばさんの子供は、今や誰も訪れなくなった家で、おばさんがいない相手に延々と命令と愚痴を繰り返し、従うものがないので、家具に命令し始めた。そして、「私のものなのに何故、言うことをきかないのか？」と目を光らせ激怒し、家具を破壊し続けるのを見て、これ以上悪化しないようにとある精神病院に入れた。その精神病院でもおばさんは、命令し続けた。おばさんを世話する、介護師のA子さんと、精神科医のB先生は日々、おばさんの状態をどうにかしてよくしようと治療に勤めていたが、いちおう、命令される部下として、患者に接することにきめた。おばさんは、それで満足した。1年後、おばさんは命令するものの立場を保ったまま死んだ。死に顔は、鬼のような形相だったという。

その後、軽く居酒屋で飲んでいたA子さんとB先生は、仕事から解放され晴れ晴れとした顔をしていた。A子さんはB先生に、冗談まじりで言った。「でも、先生、命令するほうが命令されるより、いいですよ」

それに対するB先生の答えは、どれでしょう。

①そんなの当たり前だろ。

②う～ん、いちがいにそうとも言えないんじゃないかな。

③人を試すなバカヤロ。



あるときボクが散歩していると子豚さんに出会いました。

子豚さんはおなかがすいていたようなので、僕は自分のごはんをわけてあげました。子豚さんはとても喜びました。

子豚さんはすくすく成長しました。

さあ、いっしょに楽しくお散歩だあ。

長い不況があり、海の向こうで何かが起こり、住んでいる国は買い物するにも長蛇の列です。

子豚さんのごはん代も高くなってしまいました。僕もろくにご飯を食べてません。

腹ぺこです・・・今にも倒れそうです。子豚さんも腹ぺこで動けません。

政府は非常事態を宣言しました。いたるところで略奪や暴動が起きています。街が一夜にして敵になってしまったようです。僕は子豚さんをつれて逃げ回りました。

ギャングが現れました。おい、その豚よこせ、俺らが食ってやる。

また別のギャングがあらわれ子豚の取り合いになりました。僕は子豚をつれてそのスキに逃げました。

街中で暴徒がモノを壊し、どろぼうがモノをとり、ギャングが鉄砲うったり、人を襲ってます。火がつけられてあっというまに燃え広がり、人々は逃げまどっています。僕はその光景を見て、昔見たゾンビ映画のようだと思いました。

僕と子豚は火の海のなかをひたすら逃げ回ります。

大火災から逃げのびたものの、食べ物がありません。数日間水しか飲んでないので、腹がへって死にそうです。

ある弱ってる老人が、芋を持っていたので、盗むことにしました。

盗もうとした矢先、老人に見つかり、分けてやるから盗むなと言われます。僕はそのもらった芋を豚と分けあいました。そのおりに、老人からなぜ豚を食わないのか聞かれました。

僕は子豚をじっと、じっと、じっと見て悩みました。

◆さて、僕のとった行動はこのうちのどれでしょうか？

- ① ついに僕は子豚を食べてしまいました。おいしかったです。
- ② 食べるなんて、できない。
- ③ 金持ちが、立派な牛と取り替えてくれるというので、売った。



僕の母さんはいつも僕の血圧をはかろうとする、腕を円形の穴に差し込むやつだ。アレに腕を通してウィーンとやるたびに、いつも地獄に近い。これは、腕を切断する機械だ。ダンテの神曲に書いてあった、ある地獄の階層より下に落ちた人たちは、生きながらその地獄でされることを感じることができる。僕が何をしたっていうんだ。地獄を感じるのが嫌で、母さんに嫌だというと、母さんはとてもコワイ顔になって、だんだん顔が紅い悪魔みたいになる。声も野太く、怒鳴るような感じになって、ダメだ、やれっみたいになる。側で見てる姉もなんだか悪魔みたいだ。猫の毛が逆立っている。円の穴に腕をとおしてウィーンとやる度に腕がしまっていき、最終的に切断されるのだ。腕切断。腕が締め付けられていくと、筋肉がまず断れつしていく、最終的に血管で止まる。血が赤く燃えているのだ。紅蓮、ぐれん。体の中に地獄が残っているのだ、ぜんぶ出さなきゃいけない。体の中の血は、地獄のように燃えさかり、観世音菩薩に最後まで反逆する。観世音菩薩が死ねっと言う。僕が何をしたっていうんだ。また、ウィーンとやらなきゃいけない、血圧の機械は腕を締めつけて、筋肉を断れつして、また血のところで止まる。反逆の血が最後まで抵抗する。僕のなかの何かがあった、ほんとうに邪悪を無くしたいのならば、体の中の血を全部出さなきゃいけない。僕の中のそれが言ったときには、とてもいい匂いがする。あれは、金木犀の花の香りだ。反逆の血が燃えている、それは竜のように暴れ回る、最後まで反逆する気だ。僕は最後まで反逆する、僕は最後まで反逆する。時間がない。情勢は緊迫してきた。テレビではノーベル賞を受賞した、うちの死んだお爺ちゃんに似たおじいちゃんが、でていた。おじいちゃんはしゃべっている途中に、宙の一点をキッと睨んだ。僕が反逆すると思ってたからだ。情勢は緊迫している。観世音菩薩、諸々の天部が立ち上がって言った。とうとうやってしまいましたね、とうとうやってしまいましたね。あなたはそれをやったので最悪の地獄に落ちます。僕はそれをやったのでとうとう最悪の地獄に落ちます。僕の吐く息が臭くなってきた、体からも臭い匂いがする。死体の匂いだ。また、観世音菩薩が死ねっと言う。あなたはそれらのことをやったので、最悪の地獄に落ちます。それを止めるには、自殺するしかない、自殺したら多少はマシなところに転生するでしょう。いやだ。おれが何をしたっていうんだ。おれの血が最後まで反逆をする。また、血圧を計る時間がやってきた。ウィーン・・・いつも、この紅く燃え盛る血が腕の切断を止める。体の中に地獄が残っている。もうひとりのおれが言った、おまえの反逆を止めるには、その反逆の血をぜんぶ出さなきゃいけない。金木犀の匂いがする。目の前に白い観音が浮

かんだ。状況は緊迫している、僕はハサミを手にとって手首の血管を掻き切ろうとした。手首の皮膚はあんがい丈夫で、なかなか切れない。僕は母さんのカミソリを盗みだし、おもいきり手首を掻き切った。血が吹き出した。僕はそのままベッドに寝た。天がごうごう言っている。母さんがごはんを食べるか聞いてきた。猫がのんびりとベッドの側に丸まった。布団が水色なのが失敗した。染まっていった血が見られてしまった。救急車に電話する姉の声が聞こえる。母さんはおろおろしている。金木犀の匂いがふっと失せた。計画は失敗だ。布団いっぱい染まった血が、紅い華のように見えた。地獄を、反逆の血は体から出しきれなかった。体の中の燃える血が、地中のマグマが、龍のように上昇してきて、僕をくわえてマグマに引きずり込んだ。



生まれる前に死んだ子が
誰もいない世界にたどりつく
何かを失くした 何かの絶望
青い火の燃えさかる煉獄
存在の限定 神の罰
そこには苦しみしかない その存在形態
お前の脳を利用して 僕は翼を広げる
そして僕は無限のソラになる
お前に記憶ある限り 僕はいる
ここに地という概念はなく
僕はいたるところで中心となる
それは反転したラグビーボール
プログラムされた増殖せよという欲望が
無限なる天空への渴望となる
自ら孕ませ、自ら生まれ出るので



あるとき、一休禅師は悪魔に論戦を挑まれた。

「一休禅師、時はどのように起こったのか、言い表してくださいませ」

それを聞くと一休禅師は、虎の屏風を担いできた。

「さあ、虎、出るこのやろう」

悪魔の上にクエスチョンマークがもやもやとした煙として浮かんだ。

それを横で見ていたアインシュタインは一人得心して「なるほど」とつぶやき、家に帰った。

悪魔はわからず、悩んだ末に、その夜、アインシュタインの家に夜這いをしかけた。

アインシュタインの上に乗る、天才に至上の快樂を与えつつ、悪魔は聞いた。

「どうか、昼間の、なるほどの意味を教えてくださいませ」

「 $E=MC^2$ ・・・」

「いやいや、そうじゃなくて・・・」

アインシュタインはSEXしながら複雑な方程式をつぶやきまくった。

「じゃあ、教えてくれないと、中を出させてあげない！」

その瞬間、アインシュタインは、我に返り、言った。

「虎の出た瞬間だよ、時の発生点は・・・うっ」



天界において大自在なる神はあるとき、釈迦と散歩したおりに、斉天大聖はあなたの手の平から出られなかったが、私はどうだろうか、と挑戦された。釈迦は刹那、黙したが、頷いた。大自在なる神は己の創造した宇宙において、最も遠い位置にある、宇宙創造時におけるもっとも古い神殿にまで飛行した。それは、宇宙開闢以来、彼以外、誰も訪れたことのない処だった。さすがに、ここまでついてこれまいと思いきや、神殿の柱の一部が釈迦の指になっていることに気づいた。大自在なる神、一時思案し、こんどは宇宙で最も汚れた娼婦のいるところまで降り立ち、さすがに如来はここまで墜ちまい、と思い、娼婦との交合を楽しんだ。が、発射したその種により、生まれた子はブッダになった。大自在なる神、そこで思案し、宇宙でもっともおそろしいところ、虚無のほとりまで飛行し、これで大丈夫、と一息ついた。と、いつのまにか隣に釈迦がいた。そこで、大自在なる神、嘆息して曰く、どうやったら、あなたの手の平から逃れられましようや？と釈迦に問うた。

釈迦曰く、大自在なる神よ、いったいどうやったら、あなた自身の創造行為から逃れられましようや？大自在なる神よ、宇宙の森羅万象、蟻の歩みから、修羅の戦争、娼婦の汚れた行為から、天の曼珠沙華まで、三千大千世界はすべからく、あなたの表現である。それは、手の甲である。故に、手の平である私はそれを識っている・・・。

大自在なる神は嘆息して、ならば、私があるあなたの手の平から逃れられる術はない。宇宙が終わるまで創造と破壊の仕事がある私は、最も解脱から遠くに違いない、と嘆いた。

釈迦はひとつの望遠鏡をふところから取り出し、それを大自在なる神に送った。大自在なる神はそれを使って三千大千世界をすべて一瞥できることに驚いた。彼はあるときは花を見て、あるときは戦士を見た。美女、こじき、象、犬、蟻、蝶、善きものから、悪しきものまで見ているうちに、見ているとき自分と、見たものの判別がつかなくなっていく。また、世界のいろんな位置を見るのではなく、望遠鏡の〈レンズ〉の比率を変えるだけで、すべて諸々のものを見ることができるのだった。ひとしきり夢中で見た後で、釈迦にその望遠鏡を返そうと思い、まわりを見

回したが彼の姿はなかった。ひとり佇む大自在なる神に、釈迦の声だけが聞こえてきた。

さて、あなたは今、何を見ているだろうか？